

# 「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部  
創立10周年に寄せて

82

もう十年になるでしょ  
うか。五葉山登山をする  
ため、朝、愛用のバイク  
で遠野から仙人峠を越  
え、晩秋の釜石へと向か  
いました。登山口である  
大松から一人ゆっくりと  
歩き始めました。五葉山  
麓の木々は葉を落とし、  
静寂そのものです。

針葉樹帯に入って間も  
なく、登山道の土の上に  
爪痕もくっきりと動物の  
足跡があります。「クマ  
だ」と感じた瞬間、私の  
すべての動きが止まって  
しまいました。窪みは真  
新しく、今しがたここを  
通ったように思われま  
す。

すぐ近くにクマがいな  
いことを願いながら、ク  
マよけの鈴を思いっきり  
鳴らしました。幸い周囲  
に変化はありません。  
「進むべきか、戻るべ  
きか」。一瞬時には判断  
できませんでしたが「登  
山続行」を決断。なら  
かな五葉山の頂上部に出  
て、やっとクマの恐怖か  
ら解放されたように思い  
ました。

言うまでもなく、五葉  
山をはじめ山は、動物園  
や遊園地のように人間の  
日常生活を延長した場所  
ではありません。いわば  
クマをはじめとする「自  
然」の領分であり、人間  
の意思とは関係のない世  
界です。

# クマとの遭遇

## クマとの「遭遇」

遠野市大工町 菊池 年 男

「客」としてその中に  
入る人間は自分の行動に  
責任を負わなければなり  
ませんが、五葉山にもい  
て当然と知っていたにも  
かかわらず、登山中に自  
分がクマに遭うかもしれ  
ないということをごの時

先では、失敗やトラブル  
はつきものです。  
バイクの時は夜になっ  
てもガソリンスタンドが  
見つからず、山の中で燃  
料切れになりかけ焦りま  
くったり、徒歩の時は食  
べ物を買うことができ  
ず、人里離れた峠の道端  
に張ったテントの中で、  
夕食がわりに非常用のカ  
ロリーメイトをわびしく  
かじったり、などなど。

ただ、思い返せばそれ  
らは、旅の先輩たちが書  
いた旅行記にでてくる  
「これは絶対自分にはあ  
りえない」と笑っていた  
失敗やトラブルとそっく  
りで、他人に起こること  
は自分にも必ず起る、

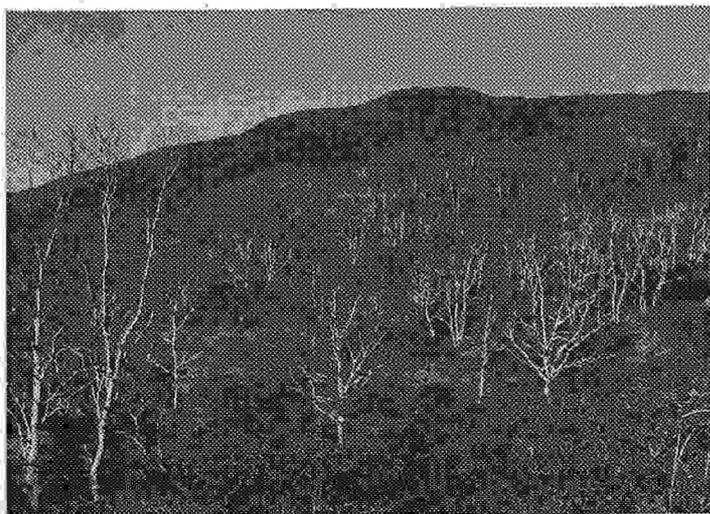
と体験としてわかっ  
るつもりではあったので  
すが。  
基本的に私が旅したよ  
うな「道路」上で起る  
ことは、それがどんな山  
奥であれ「人間界」の出  
来事で、その周りの自然  
はその「外側」にありま  
す。たとえそこでクマと  
遭ったとしても、それは  
クマが「出てきた」とみ

まで真剣に考えていませ  
んでした。  
二十五年前になりま  
すが、私は原付のオフロ  
ードバイクで山の中の林  
道を繋ぎながら日本一周  
をしたことがあります。  
また十五年ほど前には、  
九州の長崎県平戸島を出  
発点に、北海道根室市の  
納沙布岬を到達点として  
二千七百キロを徒歩で旅行  
しました。そのような旅

なされま  
す。  
ところが登山道は  
「道」とはいいながら自  
然の「内側」にあり、人  
間の側がその中に入って  
いくにもかかわらず、私  
は山の中に一般の道路と  
同じ人間界の気分をその  
まま持ち込んでしまい、  
自分が山や自然に対して  
「ぞんざい」になってい  
たような気がします。

のふるさと遠野を象徴す  
る遠野物語の中で、百年  
前の人々は山を「神域」  
として畏れ、敬い、その  
中で人間の身勝手な行  
いは「山の神」を怒らせ  
ると描かれています。生  
きるために山に入ってい  
た昔の人々に比べ、山や  
自然との密接さを失って  
しまった現代の自分が、  
それとどう向き合ってい  
くべきなのか、五葉山で  
堂々を経営。

晩秋の五葉山麓



私の生まれ育った民話